

究によると、A T降灰前後の2万5千年前～3万年前前後に位置している。今回は、編年研究を重視して、本石器群をA T降灰前後と考えたが、詳細な検討は資料の増加を待って行いたい。

## (5) 遺 跡 の 性 格

本遺跡の石器群の特徴は前述の通りである。このことから、原石から原石に近い形状まで復元された接合資料まで出土しており、石器製作を行っていたことは確かであるが、石器製作時に多量に産出する碎片類が非常に少ないのも特徴的である。調整技術が未発達であることも一因と考えられるが、本調査区以外の場所で細部調整を行っていたことや石器製作の道具とともに石核や素材剥片を一括して搬入し、ごくわずかな加工のみ行っていたことも可能性として考えられる。しかし、いずれにしても、本遺跡は、多様な種類の在地の石材を利用して、剥片剥離技術Aと剥片剥離技術Bによる石器製作活動の拠点的な場所であったといえる。

## 2 縄文時代・弥生時代

### (1) 遺 構

上部平坦面で、赤穴式期と考えられる竪穴住居1棟、竪穴住居と同時期の可能性が高い住居状遺構1棟、集石遺構1基が検出された。居住域として利用されていたことは確実であるが、竪穴住居1棟と少ない。このことから、拠点的な集落ではなく、一時的なものもしくは一般的集落ではなく、特殊な場であった可能性が考えられる。当該期の竪穴住居の検出例は少なく、貴重な資料となることが期待される。

### (2) 紡 錘 車

紡錘車が出現するのは弥生時代になってからである。円板の中央に軸棒を通した形のもので、円板を回転させ、その重量に生じる力によって繊維に撚りをかけ糸を紡ぐためのはずみ車として、布作りの工程の一端を担う道具である。

本遺跡から出土した紡錘車は土製であるため、土製のものを対象として、県内から出土した弥生時代に帰属すると考えられるものを集成したのが第154図と第31表である。

これらの出土資料を一覧してみると、外径の法量を大中小の3つに分けられる。小形は5cm前半のもので、台太郎遺跡（盛岡市）2例・豊岡V遺跡（岩泉町）1例、谷起島遺跡（一関市）1例の計4例である。中形は6cm代のもので、鷗ノ木遺跡（奥州市）1例、熊穴洞穴遺跡（一関市東山）1例、

第31表 岩手県出土の弥生時代の紡錘車

番号	遺跡名	法量 (cm)			文様	時期
		径	孔径	器厚		
1	鷗ノ木	6.0	0.7	1.2	沈線、刺突（両面）	後期（赤穴）
2	豊岡V	5.4	0.5	1.3	沈線（両面）	後期（赤穴）
3	豊岡V	[6.6]		(1.5)	沈線（両面）	後期（赤穴）
4	豊岡V	[6.6]		(1.3)	沈線（両面）	後期（赤穴）
5	湯舟沢	8.1	0.7	(1.5)	撚糸圧痕（片面）	後期（湯舟沢）
6	台太郎第51次	5.3	0.6	1.6	刺突（両面）	後期
7	台太郎第51次	5.1	0.3	1.3	無文	後期？
8	谷起島	※5.0	※0.5	※0.9	沈線？	中期（谷起島）
9	熊穴洞穴	6.4	0.9	1.3	沈線（片面）、刺突（片面）	縄文時代晩期末様 ～弥生時代前期初頭



第154図 弥生時代の紡錘車集成図

豊岡V遺跡2例の計4例である。大形は8cm前半のもので、湯舟沢遺跡（滝沢村）の1例である。全体的に出土事例が少ないため、これらの差がどのような要因によるものか判断することは困難であるが、現段階では小形・中形に関しては地域による差はみられないように思われる。

### 3 奈良時代・平安時代

当該期の遺構は土坑1基、溝1条、柱穴1個である。遺構の分布は上部平坦面の縁辺部に当たり、中心部には見られない。竪穴住居等の居住域として利用した痕跡は確認されず、場の利用の詳細は不明と言わざるをえない。しかし、風倒木痕からの出土ではあるが、土器が出土しており、隣接する場所に居住域が存在する可能性が高い。

時期については、出土した土師器坏を概観すると、大きく8世紀末と9世紀後半の2時期に分かれるものと考えられる。

### 4 中世以降

遺構・遺物とも少なく、詳細は不明であるが、17世紀～19世紀の陶磁器が出土しており、隣接する場所にこれらの道具を利用していた人々の居住域が存在するものと考えられる。

### 5 総括

今回の発掘調査で判明したことを列記して総括とする。

- ・旧石器時代には剥片剥離技術A（調整技術の未発達な石刃技法）と剥片剥離技術Bによる石器製作活動が行われる拠点的な場所であった。前者はナイフ形石器、後者は台形石器の素材剥片として利用された。
- ・真正の石刃技法による石器（ナイフ形石器や彫器の一部）も組成するが、遺跡内での製作は行われておらず、搬入品と考えられる。
- ・旧石器の帰属する年代の詳細は断定できないが、石器の編年研究から判断すると、AT降灰前後に位置すると考えられる。
- ・弥生時代後期には居住域として利用されていたが、小規模なものである。
- ・弥生時代後期の紡錘車が出土し、紡織に関わる生業が行われていたことが考えられる。
- ・奈良時代・平安時代の場の利用の詳細は不明であるが、大きく分けて8世紀末と9世紀後半を中心とした2時期の遺物が出土しており、隣接する場所に居住域が存在する可能性が高い。
- ・17世紀～19世紀の陶磁器が出土し、周辺に居住域が存在する可能性が高い。